

高精度な治具製造で顧客の要望に全力で応える

株式会社井上工作所 奈良県香芝市

株式会社井上工作所は、1970年の創業以来50有余年、フライス加工技術を原点として各種治具・検査用治具・精密機械部品等の製造に一心に携わってきた。

素材の特性や形状に合わせた最適な加工を行える技術力と少ロットや短納期への対応など顧客からの厳しい要望にも全力で応え続けることで、自動車・航空・建設機械・医療など、様々な業界の大手メーカーからも揺るぎない信頼を獲得している。

“お客様の要望に全力で応えることで「モノづくり分野での感動」と「それに関わる人々の幸せ」に貢献する。”という経営理念を今後も愚直に追い求め続け、次の10年、20年の躍進に向けて、同社は成長を続けていく。

会社概要



会社名：株式会社井上工作所
所在地：奈良県香芝市北今市4丁目323-1
電話：0745-77-7272
FAX：0745-78-2666
創業：1970（昭和45）年6月
設立：1985（平成60）年1月
代表者：代表取締役 井上 卓一
資本金：1,000万円
社員：25名（パート含む）
事業内容：各種治具・検査用治具・精密機械部品等の製作

URL：<https://www.inoue-kousakusyo.com/>



自然と笑みがこぼれる集合写真

取引先から信頼される確かな技術力

株式会社井上工作所は、1970年に香芝市で創業し、現在は6代目社長の井上卓一氏が率いる治具*メーカーである。

※加工物（ワーク）を固定して、位置決めをしたり、加工しやすく（案内）したりする補助工具。

同社は、良い道具と良い職人が揃って初めて良いものづくりができるという考えから、様々な最先端工作機械や検査機器を取り揃えている。職人に関しては、加工技術に関する資格保有者が多く、1級技能士が3名、2級技能士が4名と技術力の高い職人が数多く在籍している。

製品の検査では、高精度検査のために設備・環境を整えた検査室を工場とは別に設け、熟練の検査専任社員4名による全数検査によって、出荷後不良発生率を極限まで抑えることに成功しており、同社の確かな技術力は、取引先からの安定した受注実績に繋がっている。



切削や研削加工を行う最先端設備（左）
万全を期した製品の検査体制（右）

トレードマークのめだか印

2020年の東京オリンピック後には日本経済が停滞し、自社の業況も厳しくなるのではないかといたった予測をたて、2017年から販路開拓のために展示会（ものづくりワールド）への出展を始めた。回数を重ねるうち、技術力のアピールだけでなく、注目を集める工夫も必要だと考えるように

なり、社員が敷地内で飼育しているめだかをトレードマークにする案を思い付いた。めだかは小さい魚であるが、日本で広く親しまれており、流れに逆らっても前に進む。また、漢字で書けば“目高”と書き、実際に目が上についており、種としては環境庁からは絶滅危惧種に指定されている。こういった特徴を踏まえて、同社は、めだかのように親しまれ、小さな会社でも頼れる存在であり続けたいという思いや、めだかのように常に上を見て仕事を行い、お客様が周囲の人たちから「いい会社と仕事をしてお目が高いね」と言われるような存在になりたいという思いに加え、時代の変化に伴って技術者不足が表面化しているものづくり業界において、希少な加工ができる会社として存続し、お客様に喜ばれる製品を提供し続けたいという思いを込め、めだか印を自社のトレードマークとすることに決めた。



トレードマークのめだか印

2017 年以降、積極的に取り組み始めた展示会において、めだか印のロゴマークを作成してからバイヤーに強烈なインパクトを残し、持ち前の技術力を効果的にアピールでき、販路も大きく広がっていった。結果として東京オリンピック後の景気後退予測とは異なったが、コロナ禍で日本経済が大打撃を受けた中、同社は大きな成長を遂げることができた。



めだか印で一際目立つ展示会ブース (左)
実際に飼育しているめだか (右)

社員全員が経営理念を徹底

同社が成長を続けているのは、販路開拓を効果的に進めてきただけでなく、社員全員が同じ方向を向き、“お客様の要望に全力で応える”という経営理念を徹底して追求してきたからである。

例えば、新規営業を行う場合、ロット数や納期など厳しい条件提示がされることが多いが、その厳しい要望に全力で応え、受注することを基準としている。井上社長が厳しい条件の案件を持ち帰っても「納期までまだ〇〇時間あります。頑張ってください！」と社員は絶対にやりきるという姿勢を見せてくれる。要望に応え、お客様から「短納期の厳しい仕事を引き受けてくださり本当に助かりました！ありがとうございます！」という感謝の反応は、労いの言葉とともに必ず社員にも伝えている。これが社員のやりがいにつながり、また次の顧客の要望に応えようという好循環を生んでいる。

社員の自主性は同社の行動指針にも現れている。7つある行動指針は社長がひとりで考えたものではなく、全て社員と話し合い考え出したものであり、また、月のスローガンについては、社長が何も言わずとも社員同士で話し合って決められている。こうした自主性が社員全員で経営理念を追求していく原動力となっている。

2035 年に向けた夢・ビジョン

同社は今後、2035 年に向けて年商 30 億円を目指しており、実際に目標としている売上水準の企業へ視察に赴き、イメージを膨らませている。「企業を大きくするためには、組織体系を現状のフラットな形から、社員の中にも管理職をつくるピラミッド型へ変更することや、事業の柱を現状の治具製造メインの一本柱から、治具製造に並ぶような柱を複数つくり、発展させていく必要がある。常にアンテナを張って、様々な手法で事業を拡大させていきたい。」と語る井上社長の目には熱い思いが込められている。(藤岡奨太、橋本公秀)